

吉田精一編

日本文学鑑賞辭典

古典編



吉田精一編

日本文学鑑賞辞典

古 典 編



東京堂出版

不
複
製
許

日本文学鑑賞辞典
(古典編)

定価 三二〇円

昭和三五年二月一五日 初版発行
昭和六〇年四月一日 二三版発行

編 者 吉 田 精 一

發 行 者 澄 田 讓

印 刷 所 文 殊 印 刷 有 限 会 社

製 本 所 渡 邁 製 本 株 式 会 社

發 行 所 株 式 會 社 東 京 堂 出 版
東京都千代田区神田錦町三ノ七(二二〇)
電話 東京二三一七四一 振替 東京二二七九

序 文

文芸作品は、社会的、歴史的産物として、その作られた社会や、歴史的状況を反映していることはもちろんである。われわれはそれを通じて特定の時代の、特殊な環境にあった人間の、思想や感情や、また彼らが追求していた問題を、ききとができる。一つの作品を理解するにあたり、われわれはことに社会環境と周囲の条件とをこまかく調査することによって、その意義を正しく読みとる努力をわれわれ自身に課さねばならない。

しかしながら、文芸作品はたんなる記録や報告ではない。それが長い年月の風雪にたえて、今日の読者にもうつたえる力をもっているのは、そこに時間と歴史とをこえる不滅の生命力と、不变の美しさとを内在しているからにほかならない。

一見すれば前者は、「知る」ことを中心命題とし、後者は、「味う」ことを目的とし、ともに別のみちを歩むように見える。前者が「眞」をめざすならば、後者は「美」を志しているかのようである。しかしわれわれの考えるところによれば、両者は決して別のものではない。正確に「知る」ことによつて、ふかい「味い方」がうまれ、深い「味い方」を待つて、正しく「知る」ことができる。われわれの仕事の理想は、それが容易には達せられないことを承知の上で、バスカルのいわゆる「幾何学的精神」と「織細な精神」との合致の上に置かれねばならない。

従来の文学辞典は、辞典としての客觀性を尊重するという意味もあって、重点を主として文献学的な方面に置き、深く味うという鑑賞面には粗漏であった。当然、「辞書的な」という形容詞が表現する、

平板で砂を噛むような叙述でみたされる場合が多かった。ことに国文学方面的ものには、その種の傾向が強く、辞典ほど面白い読み物から遠い性格のものはなかったのである。

本書は、この点にかんがみ、正しい文献学的な調査研究は踏まえつつも、それを幾分裏にまわし、意義内容をいかに読み味うべきかという、鑑賞面を主眼として、新しい編纂をこころみた。「文学鑑賞辞典」と銘うたたのは、その理由からである。

このために、古典・近代の二編を通じて、日本文学史上の名作佳編をできる限り網羅し、忠実な解説に加えて、正しく深い鑑賞による価値判断と、史的意義の設定をこころみた。出来栄えについては、大方の批評を待つべきだが、作品の本質的な解明と味解という点では、在來の辞書類から数歩前進することを期したのである。

初学の人たちにとっては、日本文学鑑賞の手引き書となり、研究者や教授者にとっては参考して役立つものとなり、一般の人々にとっては、独立した興味ある読み物となるというのに、この書編集のねらいの一つでもあったが、多少ともその目的が達せられているとすれば、編者としてよろこびに耐えないものである。

なお、このしごとのために、中堅、新進の専門家数十名の参加をねがつたが、ことに編纂者としては、長野嘗一、竹下数馬、鈴木重三、古川清彦、野村貴次の諸氏に担当していただいた。ここに記して深い感謝の意を表する。

昭和三十五年初冬

吉田精一

凡例

八番) および歌集(万葉集など) 句集(芭蕉七部集) その他(風土記など) の大項目には作品または作家の小項目を設けた。

△本書は、上代から近世末にいたる日本文学全般から約三〇〇の作品を選び、各作品に鑑賞を施すことを主眼とした。

△項目は、各作品を五十音順に配列して構成した。し

たがって、時代・形態の方から作品を検出するときは卷頭の時代・形態別項目表または卷末の作品・事項索引により、また、作家名の方からの検出には卷末の人名索引によると便利である。

△各作家の略歴は、「作者」として項目の末尾に付し、おもな経歴および主要作品などをあげるに止めた。一作家で二作品以上収載した場合、その作家の略歴は、五十音順による最初の項目の末尾に付した。たとえば、井原西鶴の場合、「好色一代男」「好色五人女」「世間胸算用」「日本永代藏」「武道伝来記」など十五作品を収めたが、その略歴は「好色一代男」の項の末尾に示してある。

△物語・戯曲などの場合は、【梗概】を設け【鑑賞】の一助とした。作品集(隨筆集・説話集・詩集・歌集・句集その他)を項目とした場合は、その中の代表的な作品をとくに取りあげて【解説】【鑑賞】を施した。集合的な戯曲作品(謡曲・狂言・歌舞伎十

△【解説】中の所収文献は、便宜上、入手しやすいもののみにとどめた。

用語・符号・索引

△引用文は、原則として原文のままにした。

△難説の語には、つとめてルビを付した。ルビは原文中にあつたものも現代表記法に統一した。

△作品名・書名には、すべて『』をつけた。

△本文中に*印のある作品名は独立項目として収録されていることを示す。

△歌集・句集中の引用は、△▽で示した。代表作品をとくに解説・鑑賞するときはこれを別行に示し、△▽は省いた。

△索引は、「人名索引」と「作品・事項索引」とに分けた。

執筆者・編集者

△各項目の執筆者は、それぞれ専門家に委嘱し、各項目の末尾にその姓名を明記した。

△編集は、吉田精一が責任者となり、委員として鈴木重三・竹下数馬・長野嘗一・野村貴次・古川清彦の五名が参加した。

時代・形態別項目表

藤原俊成	和泉式部集	西行	時代
曾丹集	散木奇歌集	山家集	時代
新撰万葉集	歌合	成尋阿闍梨母集	西行
和漢朗詠集	○歌謡	新撰万葉集	西行
神楽歌	和漢朗詠集	梁塵秘抄	東遊
催馬樂	○歌謡	梁塵秘抄	東遊
苔の衣	○物語	石清水物語	住吉物語
秋夜長物語	○物語	苔の衣	松浦宮物語
建春門院中納言日記	○日記・紀行・隨筆	十六夜日記	松浦宮物語
弁内侍日記	○日記・紀行・隨筆	海道記	住吉物語
東関紀行	○日記・紀行・隨筆	明月記	吉野拾遺
徒然草	○日記・紀行・隨筆	無名草子	梅松
忍物語	○説話	方丈記	吉野拾遺
お伽草子	○説話	徒然草	増鏡
保元物語	○戦記物語	源平衰衰記	愚管抄
平治物語	○戦記物語	太平記	神皇正統記
平家物語	○戦記物語	太平記	吉野拾遺
申楽談義	○謡曲	大輪一露	吉野拾遺
花伝書	○謡曲	狂言	吉野拾遺
隅田川	○謡曲	狂言	吉野拾遺
安宅	○謡曲	狂言	吉野拾遺
船弁慶	○謡曲	狂言	吉野拾遺
融	○謡曲	狂言	吉野拾遺
忠	○謡曲	狂言	吉野拾遺
度	○謡曲	狂言	吉野拾遺
松	○謡曲	狂言	吉野拾遺
風	○謡曲	狂言	吉野拾遺
井	○謡曲	狂言	吉野拾遺
筒	○謡曲	狂言	吉野拾遺
三人法師	鉢かづき	狂言	吉野拾遺
物臭太郎	物臭太郎	狂言	吉野拾遺
一寸法師	一寸法師	狂言	吉野拾遺
文正草子	文正草子	狂言	吉野拾遺
福富草子	福富草子	狂言	吉野拾遺
猿源氏草子	猿源氏草子	狂言	吉野拾遺
唐糸草紙	唐糸草紙	狂言	吉野拾遺
沙石集	沙石集	狂言	吉野拾遺
唐物語	唐物語	狂言	吉野拾遺
宝物集	宝物集	狂言	吉野拾遺
古今著聞集	古今著聞集	狂言	吉野拾遺
古事談	古事談	狂言	吉野拾遺
撰集抄	撰集抄	狂言	吉野拾遺
発心集	発心集	狂言	吉野拾遺
藤原俊成	藤原俊成	狂言	吉野拾遺

中世

時代・形態別項目表

○連
歌

○和歌	新古今和歌集	卷一
後鳥羽院	藤原定家	卷二
藤原家隆	藤原良経	卷三
式子内親王	俊成女	卷四
玉葉和歌集	風雅和歌集	卷五
風葉和歌集	新葉和歌集	卷六
近代秀歌	秋篠月清集	卷七
金槐和歌集	草庵集	卷八
草根集	建礼門院右京大夫集	卷九
小倉百人一首	夫木和歌抄	卷十

近世

○歌謡	○宗教文学	閑吟集	正法眼藏	歎異抄	恨の介	薄雪物語	伊曾保物語	可笑記
新撰大筑波集	新撰苑玖波集	ささめごと	ひとりごと	吾妻問答	老のくりごと	竹林抄	老のすさみ	新撰苑
新撰苑	新撰苑	三〇	七一	八一	八一	四四	八四	三〇
苑玖波集	苑玖波集	六四	九五	七	八	四四	八四	七
水無瀬三吟	俳諧之連歌独吟干句	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇

○浮世草子	他我身の上	器
好色一代男	二人比丘尼	童
好色五人女	竹齋	哭
好色一代女	東海道名所記	哭
西鶴諸国はなし	伽婢子	哭
本朝二十不幸	本朝二十不幸	童
男色大鑑	武道伝来記	童
武家義理物語	武家義理物語	童
懷硯	日本水代藏	童
世間胸算用	世間胸算用	童
諸艶大鑑	西鶴置土産	童
諸艶大鑑	西鶴織留	童
万の文反古	万の文反古	童
御前義経記	御前義経記	童
浮世親仁形氣	浮世親仁形氣	童
けいせい色三昧線	けいせい色三昧線	童
好色敗毒散	好色敗毒散	童

○合	修紫田舍源氏
卷	三七
○洒落本	
遊子方言	七三
通言總離	四九
世說新語茶	四七
傾城買二筋道	二〇六

時代・形態別項目表

○人情本	春色梅兒營美	三十石燈始	傾城淺間嶽
眞名文章娘節用	道中膝栗毛	鎌の権三重帷子	大商蛭小島
○滑稽本	風流志道軒伝	心中二つ腹帶	伽羅先代萩
眞名文章娘節用	浮世風呂	眞名手本忠臣藏	五大力恋緘
○咄本	浮世床	義經千本桜	東海道四谷怪談
眞名文章娘節用	花曆八笑人	眞名手本忠臣藏	究浮世柄比翼稻妻
○淨瑠璃	咄本	双蝶蝶曲輪日記	お染久松色説販
眞名文章娘節用	醒睡笑	ひらかな盛衰記	与話情浮名横柳
曾根崎心中	鹿の巻筆	一谷嫩草記	萬紅葉宇都谷崎
丹波与作待夜の小室節	きのふはけふの物語	本朝二十四孝	三人吉三廟初買
博多小女郎波枕	○歌舞伎脚本	妹背山婦女庭訓	青砥稿花紅彩画
冥途の飛脚	歌舞伎十八番	新版歌祭文	天衣紛上野初花
六七	助	神靈矢口渡	一
六七	毛拔	近頃河原連引	一
六七	矢之根	艶容女舞衣	一
六七	神	○歌舞伎脚本	ト養狂歌集
六七	六	新頃河原連引	徳和歌後万載集
六七	暫	妹背山婦女庭訓	古今夷曲集
六七	助	歌舞伎十八番	太平楽府
六七	六	歌舞伎十八番	四方のあか
六七	毛	○和歌	○狂歌・狂詩・狂文
六七	毛	梨本集	ト養狂歌集
六七	毛	賀茂翁歌集	徳和歌後万載集
六七	毛	天降言	古今夷曲集
六七	毛	六帖詠草	太平楽府
六七	毛	桂園一枝	四方のあか
六七	毛	良寛歌集	○狂歌・狂詩・狂文
六七	毛	平賀元義歌集	ト養狂歌集
六七	毛	草徑集	徳和歌後万載集
六七	毛	志濃夫廻舍歌集	古今夷曲集
六七	毛	海士のかる藻	太平楽府
五元集	○俳諧・俳文	新增大筑波集	山家鳥虫歌
五元集	五元集	談林十百韻	松の葉
五元集	五元集	貝おはひ	隆達小歌
五元集	五元集	芭蕉七部集	六真
五元集	五元集	冬の日	五元集
五元集	五元集	春の日	五元集
五元集	五元集	曠野	五元集
五元集	五元集	ひさご	五元集
五元集	五元集	猿蓑	五元集
五元集	五元集	炭俵	五元集
五元集	五元集	統猿蓑	五元集

時代・形態別項目表

玄峰集	一一一	駿台雑話	四二
野ざらし紀行	一一一	常山紀談	三六
笈の小文	一一一	胆大小心錄	三七
更科紀行	一一一	源氏物語玉の小櫛	三八
おくのはそ道	一一一	玉勝間	三九
幻住庵記	一一一	東遊記	四〇
嵯峨日記	一一一	鳩翁道話	四一
去來抄	一一一	折たく柴の記	四二
三冊子	一一一	一話一言	四三
風俗文選	一一一		
独ごと	一一一		
鶴衣	一一一		
夜半樂	一一一		
新華摘	一一一		
蕪村七部集	一一一		
おらが春	一一一		
千代尼句集	一一一		
○川柳・雜俳	一一一		
武玉川	六九		
誹風柳多留	五六		
○隨筆・その他	一一一		
難波土産	五六		
役者論語	五六		
花月草紙	一二		

五十音順項目表 [目次]

青砥稿花紅彩画	一	大商蛭小島	六
秋篠月清集	三	おくのほそ道	八
秋夜長物語	四	小倉百人一首	六
吾妻問答	七	お染久松色読販	一〇
海士のかる藻	九	落窪物語	一一
天降言	一	伽婢子	一〇
十六夜日記	三	おらが春	一一
和泉式部集	五	折たく柴の記	一二
和泉式部日記	六	女殺油地獄	一二
伊勢物語	一〇	貝おほひ	二六
伊曾保物語	一一	海道記	二六
一谷嫩軍記	二〇	懐風藻	二七
一話一言	二二	神楽歌	二九
一寸法師	二三	花月草紙	二九
今鏡	二四	蜻蛉日記	二九
妹背山婦女庭訓	二五	可笑記	二九
石清水物語	二六	花伝書	二九
老のくりごと	二八	仮名手本忠臣蔵	二九
笈の小文	二九	仮名文章娘節用	二九
老のすさみ	二九	歌舞伎十八番	二九
往生要集	二九	賀茂翁家集	二九
江戸生鮑氣樺焼	三一	唐糸草紙	二九
唐物語	三一	閑吟集	二九
菅家文草	三一		
記紀歌謡	一一		
義経記	一一		
きのふはけふの物語	一一		
堀翁道話	一一		
狂言	一一		
玉葉和歌集	一一		
舉白集	一一		
去来抄	一一		
金槐和歌集	一一		
金々先生栄花夢	一一		
近代秀歌	一一		
金葉和歌集	一一		

五十音順項目表

幻住庵記	三一	駿台雜話	四三
建春門院中納言日記	三二	醒睡笑	四二
源平盛衰記	三三	世說新語茶	四五
玄峰集	三四	千載和歌集	四六
建礼門院右京大夫集	三五	撰集抄	四七
好色一代男	一	宣命	四八
好色一代女	二	大悲千祿本	四九
好色五人女	三	太平樂府	五〇
好色伝受	四	玉勝間	五一
好色敗毒散	五	他我身の上	五二
江談抄	六	竹取物語	五三
古今著聞集	七	胆大小心錄	五四
古今和歌集	八	歎異抄	五五
国姓爺合戦	九	丹波与作待夜の小室節	五六
苔の衣	一〇	談林十百韻	五七
五元集	一一	住吉物語	五八
古今夷曲集	一二	菅原伝授手習鑑	五九
古事記	一三	新葉文	六〇
古事記	一四	新版歌祭文	六一
鹿の巻筆	一五	神皇正統記	六二
後拾遺和歌集	一六	新增大筑波集	六三
御前義経記	一七	神靈矢口渡	六四
後撰和歌集	一八	新華摘	六五
五大力恋讖	一九	新葉集	六六
古本説話集	二〇	太平記	六七
今昔物語集	二一	太白記	六八
西鶴置土産	二二	他我身の上	六九
西鶴織留	二三	竹取物語	七〇
西鶴諸國はなし	二四	玉勝間	七一
催馬楽	二五	胆大小心錄	七二
嵯峨日記	二六	歎異抄	七三
狹衣物語	二七	丹波与作待夜の小室節	七四
ささめごと	二八	談林十百韻	七五
讚岐典侍日記	二九	住吉物語	七六
更科紀行	三〇	菅原伝授手習鑑	七七
更級日記	三一	新葉文	七八
申楽談義	三二	新版歌祭文	七九
猿源氏草子	三三	神皇正統記	八〇
山家集	三四	新增大筑波集	八一
山家鳥虫歌	三四	神靈矢口渡	八二
三十石船始	三五	新華摘	八三
三冊子	三六	新葉集	八四
三人吉三廓初買	三七	太平記	八五
三人法師	三八	太白記	八六
三宝絵詞	三九	他我身の上	八七
散木奇歌集	四〇	竹取物語	八八
鹿の巻筆	四一	玉勝間	八九
詞花和歌集	四二	胆大小心錄	九〇
十訓抄	四三	歎異抄	九一
忍音物語	四四	丹波与作待夜の小室節	九二
住吉物語	四五	談林十百韻	九三
菅原伝授手習鑑	四五	住吉物語	九四
新葉文	四五	菅原伝授手習鑑	九五
新版歌祭文	四五	新葉文	九六
神皇正統記	四五	神皇正統記	九七
新增大筑波集	四五	新增大筑波集	九八
神靈矢口渡	四五	神靈矢口渡	九九
新華摘	四五	新華摘	一〇〇
新葉集	四五	新葉集	一〇一
太平記	四五	太平記	一〇二
太白記	四五	太白記	一〇三
他我身の上	四五	他我身の上	一〇四
竹取物語	四五	竹取物語	一〇五
玉勝間	四五	玉勝間	一〇六
胆大小心錄	四五	胆大小心錄	一〇七
歎異抄	四五	歎異抄	一〇八
丹波与作待夜の小室節	四五	丹波与作待夜の小室節	一〇九
談林十百韻	四五	談林十百韻	一〇一〇

五十音順項目表

近頃河原達引	通言總辭	西山物語	平賀元義歌集	平賀元義歌集
竹斎	菟玖波集	修紫田舎源氏	本朝水滸伝	発心集
竹林抄	萬紅葉宇都谷時	日本永代藏	本朝廿四孝	大美
千代尼句集	堤中納言物語	二人比丘尼	本朝二十不孝	大美
椿説弓張月	徒然草	東海道名所記	日本靈異記	大美
		東海道四谷怪談	日本書紀	三五
		東闕紀行	風俗文選	三七
		道中膝栗毛	風雅和歌集	三三
		東遊記	風葉和歌集	三一
		徳和歌後万載集	風流志道軒伝	三五
		土佐日記	福富草子	三九
			武家義理物語	三七
			藤村七部集	三一
			双蝶曲輪日記	三五
			仏足跡歌	三九
			武道伝來記	三七
			風土記	三一
			夫木和歌抄	三五
			文正草子	三九
			文武二道万石通	三一
			平家物語	三三
			平治物語	三〇
			平中物語	三三
			弁内侍日記	三三
梨本集	英草紙	水無瀨三吟	舞の本	大美
難波土産	浜松中納言物語	昔話稻妻表紙	枕草子	大美
男色大鑑	春雨物語	武玉川	増鏡	大美
南総里見八大伝	とかへばや物語	無名草子	松の葉	大美
		伽羅先代萩	松浦宮物語	大美
			萬葉集	大美
保元物語	ひとりごと	冥途の飛脚	水無瀨三吟	大美
方丈記	独ごと	明月記	枕草子	大美
宝物集	ひらかな盛衰記	伽羅先代萩	増鏡	大美
			松の葉	大美
			松浦宮物語	大美
			萬葉集	大美

五十音順項目表

役者論語	夜半樂	大和物語	鎌の権三重帷子
一〇三	一一〇	一一〇	一一一
遊子方言			
七二三			
謡曲			
七六			
義経十本桜			
七六			
吉野拾遺			
七三			
四方のあか			
七三			
万の文反古			
七三			
与話情浮名横櫛			
七六			
夜半の寝覚			
七四			
隆達小歌			
七四			
良寛歌集			
七六			
梁塵秘抄			
七九			
六帖詠草			
七五			
六輪一露			
七五			
和漢朗詠集			
七七			

あ

青砥稿花紅彩画

はおとぞう

歌舞伎脚本 世話物 五

幕八場

河竹黙阿弥（當時二世河竹新七）

【解説】文久二年（一八六二）三月の市村座において初演された黙阿弥初期の代表作の一と目される。江戸末期において全盛を誇った、いわゆる白浪狂言（盜賊を主人公とした劇）の系列に属し、『三人吉三』と並んで、現在も繰り返し上演される。黙阿弥はこの作を、亀戸豊國の画いた当時の気俳優の五人男の見立錦絵からヒントを受け、在来の白浪物中、日本駄右衛門その他の人名を借りて、通し狂言として書いた。これらの盗賊は、終幕に至つて青砥左衛門藤綱の手によって捕縛されるが、これは馬琴の『青砥藤綱模稟案』以来名奉行として人口に膾炙した青砥藤綱を登場せしめたもので、三世桜田治助にも、模稟案の翻案脚色『青砥稿』がある。本作の別名題としては、『弁天娘女男白浪』『江島育児生兒菊』『音菊弁天小僧』などがあるが、いずれも主人公である弁天小僧によつた名称で、後の二つは初演以来五世尾上菊五郎の当り役で、その後も音羽屋の家の芸とされたところから、菊の字を織り込んで組ま

れた名題である。『黙阿弥全集四』『岩波文庫』

【梗概】序幕は長谷觀音の花見の場である。小山家の息女千寿姫は長谷寺の花見に、許嫁の信田の小太郎と行き会つて、思いのだけを語るうちに、お家の重宝胡蝶の香合を渡して、小太郎の仮住居へ同行することになる。この小太郎なるものが、実は弁天小僧が重宝を奪うために化けていることを、千寿姫は知らない。一方御主君信田の左衛門の後室を伴つて、お家の再興をはかる赤星頼母は、甥の十三郎に主の命を救うため百両の金を調達するよう頼む。十三郎は思い余つて、千寿姫が宝前に供えた回向料の百両を盗むが、たちまち小山の家来に見つけられ、奪い返される。これを行き交うた色奴の沼田幸蔵（実は忠信利平）がまた奪い取り、それに目をつけた信田小太郎の仲間（実は南郷力丸）がさらに奪おうとするのを、結局忠信に持つて行かれ。話変わって、千寿姫を連れた信田の小太郎は人気のない神輿ヶ岳の辻堂で化の皮をあらわすので、愕然として千寿姫は谷へ身を投げる。と辻堂の中から修驗者風の日本駄右衛門が現われ、見とがめられた弁天小僧は結局、駄右衛門の手下になる。一方、せつかく手に入れた百両を奪われた十三郎が申しわけに死のうとするのを、忠信は止める。二人はかつての主従であることがわかり、忠信は百両を十三郎に返し、十三郎は駄右衛門の一味に加わり、盜賊となつて、お家再興の金をつくることになる。ここへ南郷と弁天が現

われ、おあつらえのだんまり模様。さて三幕目が眼目の浜松屋である。娘に化けた弁天小僧は、南郷を若党に仕立てて、浜松屋へ来て、万引と見せかけて、店の者に打拂させ、それと言いがかりに金をゆすろうという魂胆。それを用人役の玉島逸当が見破るので、二人はしぶしぶ引き揚げる。ところが実はこれがまた狂言で、二人の去った後、浜松屋の亭主が逸当に礼をしようというと、にわかに逸当は日本駄右衛門の本性を現わし、強盜に早変わり、弁天、南郷も暴れ込み、あわやというところで、実は亭主の伴宗之助は、駄右衛門の実子、弁天は亭主の実子と知れて一同驚く。第四幕は稻瀬川で有名な勢揃いの場である。ここに五人男が捕つて、捕手と立ち回りの末、捕手を倒して画面の見得。第五幕では胡蝶の香合をかえそそうとする弁天が、悪次郎に香合を奪われ、極楽寺山門の屋根に追い上り、捕手にかこまれ立腹を切る。一方駄右衛門は山門で、捕手を斬り倒すが、他の四人も捕われたり、死んだりした次第を聞き、神妙に青砥左衛門藤綱の縛につく。肝心の胡蝶の香合は、滑川の底に沈んでいたのを、青砥藤綱が、銭一〇文を落したのを拾うために、五〇文の松明を使って搜させた時、一緒に拾い上げて、めでたしめでたし。

【鑑賞】歌舞伎の脚本—特に後期の作を純粹に文学的立場から鑑賞することは不可能である。文学として読んだら、むしろ失望するばかりだ。この作でも、作中人物の「実は

実は」がうるさく重なってきて、それならそこまで運んできたのは、一体何のためだったかと作者の頭を疑いたくなる。けれどもそういう理屈をいつたら、歌舞伎脚本の鑑賞はできなくなる。歌舞伎脚本は、もつと官能的に、主役に扮する人気俳優の肉体を同時に思い浮べながら、そこに展開される豊満な色彩的な雰囲気に酔う以外にない。それができない読者は、遠慮なく捨てるがいい。——冒頭から極論のようなことを持ち出したのは、これが「あ」の項で、本辞典の歌舞伎脚本の最初に出る項目であると思ったからだ。そして、そういう観点に立った場合には、本作は從来繰り返し上演されるに足る世話物の代表作たるにふさわしい充足感を持っている。序幕はおそらく『新薄雪物語』の花見を想定して執筆されたものだろう。華麗な舞台を背景に、小姓、色奴、若衆、姫が次々登場し、絢爛たる歌舞伎絵巻を開幕する。一転しては神樂ヶ岳の暗鬪を殺し、だんまり。やがてそれが、いわゆる生世話特有の情緒的な写実感の中へ、大振袖の美女が尻をまくって大あぐらという、本作中第一の頂点を開幕するのである。当時の退廃美を好む風潮を、これはどううまくキャッチした場面は、歌舞伎作品中にも数少ない。思うに歌舞伎は当時の町人子女の愛好を得ていたから、これらの子女は、女装している人気俳優五世菊五郎（当時、羽左衛門一九歳）が、一気に尻をまくつて見せる場面では、どよめきに似た嘆声をもらしたに違い